

ジョナサン カナダ出身の元キリスト教徒

説明： 彼が祈りを捧げたとき、いかに神がこたえてくれたか。

より ジョナサン

掲載日時 29 Jun 2015 - 編集日時 29 Jun 2015

カテゴリ： [記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [男性](#)

私はムスリムであることを光栄に感じています。



そう感じるのには多くの理由があります。私が住む社会の中には、ムスリムであることとは相反する数々の基準があります。私が最初にこの生き方を始めたとき、どこまでそれに忠実であるか分かりませんでした。ムスリムになることとは、基本的には明白な少数派に属することであり、それは通常、人が進んでするようなことではないからです。しかし純粋なイスラームの教えについて学んだ後、私はイスラームを真理として受け入れなければならないと感じたのです。

私の短い人生の大きな部分をムスリムとして過ごした今、神がクルアーンの中で語っている「闇」について知ることができました。どのようにしてアッラーが私の目を開き、闇を光で照らしたかを覚えています。私の人生の初期には、決定的な導きというものがありませんでした。

創造という概念の最も初歩的な側面にさえ私はうろたえました。私は神が大自然の中に示す奇跡に対して無頓着でした。理科の授業で蒸発について学んだときのことを覚えています。私はそれを理解できませんでした。何が理解できなかったかということ、その過程ではなく、それが起きる根本的な原因についてです。

水循環と生命におけるその重要性は理解できたのですが、何が水を蒸発させ、それを再び空に戻すのかが私にとっては不可解でした。

神を知らずしてそうした疑問に突き当たったとき、私の思考は答えを見つけ出すことのできない障壁にぶちあたってしまいました。私はただ単に肩をすくめ、そうした考えを頭の片隅に追いやるしかありませんでした。

人間の身体の大部分が水から構成されているということや、または大宇宙の果てについて考えを巡らせていると、そうした創造の原因についてまったく理解できないでいました。

科学者たちは方法論については説明するものの、「なぜか」ということについては決して触れません。つまり、彼らは創造の力学の範疇では目的について説明するものの、力学そのものの目的については決して説明できないのです。何が力学を発生させたのか、そして自然界に法が引き起こされた原因とは何なののでしょうか？

実践的でないキリスト教徒の家庭で育った私は、キリスト教についての一般知識程度は持ちあわせていました。なぜ私がそこに導きを求めなかったのかという理由は、それが一度も理にかなったものには見えなかったからです。子供の頃に「神」と言う言葉を聞くと、どこかにいるはずの、絶対的かつ唯一で全能の存在を思い浮かべていました。

私が抱いていたキリスト教に対する問題はその教義で、さらに言えば神についての信条でした。つまり、それは本質的には3つの異なる位格が同一となり1つの神の役割を果たす「三位一体」の問題です。それが三位一体論の公式な教義として主張されているのではないことは知っていますし、バイブル読書に熱心なキリスト教徒は私が教義を理解できていないと糾弾するでしょうが、私自身には現実的にそうとしか映らないのです。

三位一体の教義に内在する問題の他にも、私はキリスト教徒たちがイエスを崇拝する事実を直視し、こう言ったものです。「もし彼らがイエスを崇拝するなら、神はどうなるのですか？」なぜならイエスはバイブルの中で、天にいる神の方が彼よりも偉大であると述べているからです。

その当時、私は正式にキリスト教を拒否しました。私はキリスト教徒 / 無神論者 / 不可知論者となりました。私は身の回り、そして自分自身と調和した人生を送りたいと思い始めました。究極の目的について無頓着だった私は、それが満足感を得ることができるものというのを条件に、破滅的な行動を取るようになりました。

私はほとんど自分の身体を気遣わなくなりました。他人に対しても同様です。私はありがちな現実逃避をするようになり、麻薬とアルコールに手を出し始めました。始めはそれを社交の道具として用いたものの、やがては鎮静剤として常用するようになりました。もしも誰かが、私に落ち着くよう言ったとしたら、私はその人物に対し「何か理由があれば落ち着くが、その理由は何もない」と反論したものでした。そしてそうした人生を数年間続け、さらなる深みにはまり、様々な麻薬に手を染め、一時は密売にも携わるようになったほどでした。

しかし、やがて私は自分が何らかの慰めを求めていることに気が付きました。私は導きの光を見たことがなく、迷い去って暗闇の中におり、それらの区別が付きませんでした。私は物事の全体像を意識し出すようになりました。

私は死について考えるようになりました。虚無という概念について考えてみましたが、それまでの人生の中でも何度もそうなったように、人生の目的について考えてみると私の頭は空白になるだけでした。そしてある夜、ベッドに横たわり熟考していた私は空を仰いで言いました。「神よ、もしあなたが本当に存在するのなら、私をお助け下さい。」

その夜は、そのことについてそれ以上はもう特に意識することなく眠りにつきました。その後、不可解な9・11事件が発生しました。私はなぜそれが起きたのか、実際には何が起きたのか、そしてどうして首謀者を直ちに特定することができたのかなど、その状況全体に対して困惑していました。そのとき、それまでに耳にしたことはあったものの、全く無知であった外来語、つまりイスラームに対して始めて意味が与えられました。

私はイスラームが文字通り、中東のどこかにある島国だと思い込んでいました。そしてそれは驚くべきことに、未だに多くの人々の間にはびこっている大きな誤解でもあるのです。ムスリムの宗教について知ってはいたものの、それは奇怪な儀礼を持つ仏教などのような宗教だと思っていました。しかしある夜、友人たちと出かけた際にイスラームが熱い話題となりました。

友人たちの何人かがイスラームは愚かな宗教だと批判し始めました。驚くべきことに、友人の何人かがムスリムで、彼らは自分たちの宗教を擁護し始めました。そうしたトピックや、それが持つ近い将来への影響に興味を持った私はイスラームについて調べてみることにしました。そして発見したことに驚きました。ムスリムたちは神を崇拝しているというのです。さらに、彼らはイエスが預言者かつ神の使徒で、彼はムスリム（神に帰依する者を指す語）であると信じ、神によって十字架に磔にされることから救われ、彼が神の位格の一部ではなく、神のみが崇拝されるべきだと主張していることを知りました。

私は幼少の頃から神を唯一の絶対的存在として信じており、キリスト教を拒否したのもイエスへの崇拝がきっかけであることから、それらの情報に共感を覚えました。

私はイスラームとキリスト教の比較検証を始めました。私は宗教問題について興味を持つようになり、絶えずその分野の読書をするようになりました。私はキリスト教の問題については祖母に相談し、イスラームについては友人たちに相談しました。そして双方に議論を検証してもらい、どちら側の議論が検証に耐え得るものなのか確かめてみました。

クルアーンとバイブルを通読し、自然界における神の奇跡を観察し、長い自己省察のプロセスを経て、私は自分にこう問いかけました。「イスラームは真理として映るものの、それは本物なのか？」そしてその瞬間、私が以前に捧げた祈りが脳裏をよぎりました。「神よ、あなたが本当に存在するのなら、私をお助け下さい。」私の全身に鳥肌が立ちました。これがその祈りに対する答えだと直感したのですが、依然としてムスリムになるかどうか躊躇しました。私が人種的 民族的にムスリムとして認められるのかが未知だったからです。

私は読書を続け、自分の決断を後押ししてくれるようなものを探していました。そしてある日、バイブルを読んでいたら、マタイの福音書26章39節に突き当たりました。それは次の章句です。

*彼は少し進んで行き、地面に額ずきになり、祈って言われた。
「父よ、できることなら、この杯をわたしから取り除いてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、あなたの御心のままに。」*

私にとってこの章句は、私がイスラームにおけるイエス観から学んだことの3つを確証しました。つまり、彼が地面に頭を付けて祈ったムスリムであったこと。そして彼は死の杯を取り除かれることを祈ったため、死を望んではいなかったこと。そして彼自身、神に助けを乞い求めていたことから、彼が神ではなかったことです。

それが、私がイスラーム改宗を決断する決定的要素となりました。ただし、使徒を受け入れないことにはその教えを受け入れることもできませんでした。それゆえ、2001年の12月28日、アッラーのご慈悲により信仰証言（

*「アッラー以外に崇拝に値するものはなく、ムハンマドはアッラーの使徒である」*とすること）をし、イスラーム改宗をしました。それ以来、私は多くの物事を達成し、様々な土地へ赴き、不可能とも思える程のことをやってきました。

信仰により、その甘美さも味わうことができるようになりますが、アッラーが私にもっと多くの善行をさせ、残りの人生もかれの道に生かしてくれるよう祈ります。あらゆる称賛はアッラーへのものです。そしてかれの使徒ムハンマドに平和と祝福あれ。アーミン。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/2485>

Copyright © 2006-2015 www.IslamReligion.com. All rights reserved.